

文学と民族と周縁性—「亡命作家」金学鉄の場合

Literature and ethnic and marginalized-In the case of "Exile writer" hakther Kim

南 鉄心

Tiexin Nan

1. 作者・作品・テキスト

文学の伝記性を徹底的に拒絶してきたロラン・バルトの「理論」を援用して或る作家の作者論を展開する。果たしてこのようなことは可能であろうか。

伝記というと、実の人生を捉えたものだと思われがちだが、しかし伝記は実人生ではない。その語源が示している通り、伝記はある個人の一生の事績を記録すること、つまり人生の記述、或いは記述された人生である。それは記述された事実として理解することも出来る。しかしその記述性ゆえにその事実性は保証されなくなる。

あるものを、言葉を通してありのままに伝える。このようなことが我々には出来ない。言葉はその伝達の過程において常に加工され、その加工のプロセスによって消費、或いは増幅される。それによって言葉には常にずれを生じてしまう。記号としての言葉（言語）は、それが指示しようとする対象とぴったり一致し、完全に重なることはない。意味は常に意味不明なもの、無意味なものをも孕んでいる。「意味」は、無意味なものを抑圧することによって初めて意味をもち始めるのである。

とはいっても、ここで伝記、或いは作者論が不可能であるということを主張するつもりはない。伝統的な、いわゆるランソン主義的な文学理論・文学方法を否定するつもりも勿論ない。或る作家を「作者と作品」の枠内で研究するのがいけないということではない。それだけが真理であり、それだけが真実に到達する唯一の方法だと主張するそのことに異義を申し立てる。それだけのことである。

同じように、伝統的な方法論だけではなく、いわゆる現代文学理論にも同様の異義を申し立てなければならない。

1968年、ロラン・バルトによって「作者の死」が宣告されて以後、現代文学理論では作者研究を軽視する傾向が強い。しかし、文学作品（芸術作品）の生産者としての作者は、靴（商品）の生産者としての匠人とは異なる側面を持っている。勿論、文学作品も商品化されている時代ではある。

靴の消費者は靴を作った職人の名前を知らなくても何の不便なく靴を履くことができる。靴の消費者は職人の名前を知ろうともしないし、知る必要もない。質がよくて履き心地がよければそれで良いのである。勿論、ブランド品のようにブランドの知名度が直接消費を刺激することもある。そして、町工場のように近所の誰が作った靴は信頼できるというようなこともあり得る。しかし「ブランド現象」は特別なケースであって、商品すべてに対

する普遍性を持っていない。それとは反対に、文学作品（芸術作品）の消費者（読者）は限りなく作品の生産者である作者について知りたがっている。作者について知らずにはいられなくなる。それは作者が実名ではなく、匿名或いはペンネームを使った場合でも同じである。勿論、作者を知らないと作品が読めない（理解できない、読解できない、楽しめないなど）ということではない。

作品に対する作者の権威に歯止めをかけるのは、作者に対する一切の情報を拒否することを意味するのではない。或る意味で言えば、作者はブランドの効果を持っている。いわゆる批評家は、ブランドを追及する消費者にほかならない。

殆どの場合、作者は作品について何も語らない。実は批評家が作者に何かを語らせているのではないか。作者が何かを語ろうとしていたかのようにしているのではないか。

「私はロラン・バルトの全集を持っている」と言う人は、たぶんロラン・バルトの研究者である。勿論そうではない可能性もある。それは別にして、そもそも彼（彼女）はなぜロラン・バルトの全集を買ったのか。ロラン・バルトの「テキスト」に惹かれたのか、それともロラン・バルトその人の「名前」に惹かれて買ったのか。つまり「作者」が先か、それとも「テキスト」が先かという問題になるが、その問い自体には何の意味もない。ロラン・バルトのテキストがロラン・バルトの名前を知らせ、ロラン・バルトの名前がロラン・バルトのテキストを読ませるのである。これは終わりも始まりもないひとつの循環の中にある。

或る作家の全集を買う時、テキストに惹かれて買おうと、著者名に惹かれて買おうと結果的には同じである。その原因には関係なく、その「場」において最終的には必ず作者の名前で選ぶことになる。これは作者が持っている「特権」が働いた結果ではない。これは作者の機能である。「誰かの全集」の場合、ここで主語になるのは「誰か」である。つまり「作者」が主語になるのである。

ブルーストなしにも『失われた時を求めて』は存在する。現に存在し続けている。しかしその前に、マルセルなしには『失われた時を求めて』は誕生しない。テキストがどれほど作者の意図から離れ、どれほど「私は私がいま語っている言葉の主人ではない」と叫んでもマルセルなしには『失われた時を求めて』は誕生しない。

完全に自由なエクリチュール、如何なる常套句にも汚されず、如何なる定型性をも免れているようなエクリチュール、子供の「喃語」みたいな「白いエクリチュール」、絶対的な「零度のエクリチュール」は存在しない。それが存在するというなら、それは「沈黙」以外の何物でもない。「作品」だけではなく、「テキスト」も「誰か」によって書かれ（エクリチュール）、「誰か」によって読まれる（レクチュール）。完全に無垢で裸の状態のテキストは存在しない。ロラン・バルトの「作者の死」も作品の唯一の代弁者としての作者の「特権」に「死」の宣告を下しただけであって、作者研究・作者論への接近の道を閉ざしたわけではない。その可能性は少しも否定されてはいない。

「全集」とは「誰か」の全集である。「誰か」という主語が指し示しているのは間違いな

く「著者名」である。これに異義を申し立てても結果は同じである。「テキスト主義」を主張する人は、買う前にまず読む行為が必要である。つまり読まなければ買えないということになる。或る作家のすべてのテキストを読まない限り、その作家の全集が買えないからである。これはほぼ無理である。「テキスト主義」から見ると本を買う行為は殆ど偶然に近い。しかし私たちの経験が教えてくれるように、本を買うという行為は多くの場合偶然によるが、明白な目的をもってなされることもある。

村上春樹の新作『1Q84』が、金融危機のなかでもベストセラーになり、よく売れているとのニュースを見たことがある。『1Q84』がなぜ売れるのか。全部読んでみたら面白かったので、それに惹かれて買う、ということではないだろう。勿論マスコミの宣伝効果は無視できない。その根本的な原因は、村上春樹が書いたということにあるのではないだろうか。

「テキストの外には何もない」という名言を、「テキストの外もテキストである」という風に読んだ方が的中であるような気がする。読書行為からすると、テキストの「外」にいる存在としての作者は作品を読解するための必要充分条件ではないが、作品をよりよく理解するための必要条件であるには違いない。同じ意味で、作品の背景にある社会、歴史、心理なども「テキストの外のテキスト」として重要である。「ホロフェルネスの首を切るユーディット」という作品（美術）が聖書（神話）を知らない人には解読できないように。勿論、解読できないから鑑賞できないということではない。現代文学理論は唯一絶対的な解読を求めない。正確な答えを求めない。正確な答えなど存在しないと主張している。これには賛成である。

本論文は、作者論を展開するものではない。しかしテキストの「外」にいる存在としての、一人のマイノリティ作家の痕跡を彼が属している周縁の果てまで追跡して見ることにする。

2. 「内的読解」と「外的読解」

果たして絶対不変の「真理」は存在するのか。それは存在するかも知れない。しかしその存在を証明するためには、「永遠」の中での実証が必要となる。これは誰にもできない。

文学は「開かれている」のか、それとも「閉ざされている」のか。この問いもこれから「永遠の論点」になるかもしれない。しかしそれが「開かれて」いても、「閉ざされて」いても文学自体は何も変わらない。「作品」と呼ばれているものも、「テキスト」と呼ばれているものもその自体には何の変化も起きない。「文学」も「作品」も「テキスト」も、それはそれとしてそこにあるだけなのだ。

問題はエクリチュール（記述行為）の方ではなく、レクチュール（読解行為）の方にある。「作品」には作者の意図が介入するといわれているが、そうではなく、作者の意図が介入するものを「作品」と呼ぶだけではないのか。この「作品」と区別するために登場した

のが「テキスト」という概念である。「テキスト」は、如何なる場合も口を開かない。それが口を開いたらため、ということになる。なぜならば、それは「作者」を通してのみ口を開くことができるからである。つまり、それが口を開いた途端に「作品」と化し、「特権」を持ち始めるからである。場合によっては、読者、特に評論家によって「特権」が与えられることもある。実際には、こちらのケースの方が多いかも知れない。著者は直接的にではなく、普通は評論家を通して口を開くことができるからである。

とは言っても、「作品」と「テキスト」の区別に問題があるのではない。問題は「読解」の方にある。二項対立的な図式になってしまうが、読解には「内的読解」と「外的読解」の二種類がある。勿論、これは便宜上決めた二分法に過ぎない。事実上、「内的読解」と「外的読解」の二種類は截然と区別できるものではない。実践場面ではこの二種類が入り混じっているのが常態である。

「内的読解」は、そこに書かれているものに集中し、精読を要請する。これは書かれているものの内部から説明しようとする読解様式である。これは「テキスト分析」である。

「外的読解」は、そこに書かれているもの以外の要素、つまり背景、環境、作者の経歴などから説明しようとする読解様式である。これは「作品分析」である。

問題はやはり、レクチュールの方にある。「作品」と「テキスト」は最初から分類され、区別されているのではない。これは視点・論点の問題である。同一事物の、「内部」に集中するか、それとも「外部」に視線を向けるかの違いである。「内容」と「形式」、「内部」と「外部」、「作品」と「テキスト」などを区別するのは、思うほど簡単なことではない。それは一枚の紙の「裏」と「表」を分離するのと同じである。それは不可能である。「裏」と「表」は、対立的なものとして存在するが、その対立によって一体となる。それは対立の統一である。矛盾し合う双方は、相互に対立しながら、相互に依存している。対立項の一方が存在しなければ、他の一方も存在しえない。

現代批評理論では、テキストの徹底的な精読を標榜する「内的読解」が賞賛されている。しかし問題は、純粋な「内的読解」が可能かということである。「外部」との関係は一切断絶した純粋な「内読」はありえない。現代文学理論もこれを認めている。「あらゆるテキストは引用のモザイクとして構築されている。テキストはすべて、もうひとつの別なテキストを吸収、変形したものである¹」と言ったジュリア・クリステヴァの「間テキスト性」理論がそれである。

純粋無垢のテキストはありえない。同じように純粋無垢の「内的読解」も存在しない。

純粋無垢の「裸の人間」がいるとしよう。「そのひと」についての情報は一切なし。性別も、民族も、国籍も、すべての情報が消えているとしよう。そして「そのひと」と接して「そのひと」について何か語ってみよう。勿論、「そのひと」は口を開かない、まるでテキストのように。

¹ 土田知則（ほか）『現代文学理論—テキスト・読み・世界』新曜社（2002）169頁。

裸の体を見ると性別が分かる。「男」か、「女」か、それとも別の何かが分かる。そして肌の色から「黒人」か、「白人」か、それ以外の人種であるかが分かる。また肌の色合いや顔立ちの微妙な様子から、純粋な人種か、それとも「混血児」であるかが分かる。全体的な外観からは、大体の年齢が分かる。

「外部」に頼らなくても、数々の情報を入手することができる。「そのひと」は「男」であり、「黒人」であり、「混血児」であり、「少年」であるなど。しかしこうした情報は本当に裸の「そのひと」の「内部」から得られたものなのか。「男」と「女」を区別する生理的知識は何処から来たのか。そして「黒人」や「混血児」や「少年」を識別するその根拠は何処から来たのか。

もし黒人しか見たことのない人なら、「そのひと」を見ても「黒人」として認識されないだろう。「そのひと」は普通の「人間」としてしか映らないはずだ。そこには「人種」も「混血児」も存在しない。それがそれとして見えるのは、それがそれとして存在するからではなく、それがそれとして見られているからである。

中国朝鮮族の作家・金学鉄、彼は中国人ではなかった。しかし彼は中国朝鮮族と呼ばれ、結局は中国朝鮮族の作家になってしまった。つまり、彼は「中国朝鮮族」として存在していたのではなく、「中国朝鮮族」として存在させられていたのである。

彼は1985年に国籍を朝鮮籍から中国籍に変えた。2001年に85歳で亡くなった彼は、16年間、中国人として生きていたことになる。その以外の69年間を彼は朝鮮人として生きていた。この金学鉄、彼は中国人なのか、それとも朝鮮人なのか。二つの「国籍」が混交される。

「国籍」が存在するのは、「国境」があるからだ。国境は、国境地帯の異種混合的な秩序によって消され、曖昧となり、無効になる。中国の少数民族地域は、殆どすでにそうなっている。そこには異なる「人種（民族）」が混じっているだけ、「国境」は存在しない。国境の消滅は、純粋同一性の消滅であり、異種混合的秩序の始まりである。これは始まりも、終わりもない循環の中で完成されている。

金学鉄が何処の作家であるかは、重要ではない。彼が何を書き残し、そしてその「痕跡」から我々が何を読み取り、何を感じ、何を想像しているかが重要である。この「重要」の中には、エクリチュールもレクチュールも含まれている。

3. 民族・国境・亡命

何かについて論ずる時、その論じられる対象としての「何か」が存在しなければならない。中国朝鮮族について論ずる時、「中国朝鮮族」というものが存在しなければならない。しかし実体としての「中国朝鮮族」は存在しない。概念としての「中国朝鮮族」も定義不可能性の中のみ「存在」している。つまり「不在」の形で「存在」している。

にもかかわらず、「中国朝鮮族」と呼ばれている人たちがいる。しかし彼らは「中国朝鮮

族」として呼ばれているだけであって、彼ら自身に「中国朝鮮族」らしきものがあるのではない。「中国朝鮮族」の「本質」というものが予め彼らの中に用意されているわけではない。それがあるはずがない。「中国朝鮮族」は「神話」の産物に過ぎない。

通称「中国朝鮮族」と呼ばれている人々を中国に住んでいる「朝鮮人」であると思ったらそれは大きな間違いである。「中国朝鮮族」と「在中朝鮮人」は異なる意味合いを持っている。この二つの「シニフィアン」は、それぞれ異なる「シニフィエ」を持っている。

「中国朝鮮族」と呼ばれている人々は、中国に約 180 万人住んでいる。彼らは朝鮮人でありながら、中国の国籍を持っている。

「在中朝鮮人」を中国では「朝僑」と呼んでいる。世界中に広がっている中国系の人々を「華僑」、朝鮮系の人を「朝僑」と呼ぶのである。最近は韓国系の人々も増えている。中国では「新鮮族」という言葉で彼らを呼んでいる。つまり、「新しい朝鮮族」という意味である。「朝僑」と「新鮮族」は朝鮮・韓国の国籍を持っている。

「在中朝鮮人」と「中国朝鮮族」の「人」の違いはと質問されると、答えようがない。その違いは何もない。両者はまったく同じである。言葉も、風習も、顔つきも、すべて同じである。しかしただひとつ、国籍だけが違う。

国籍は、ひとつのシンボルに過ぎない。まずは国境があり、その国境の向こう側のものと此方側のものを区分するために、国籍が存在する。

国境はひとつのラインである。目に見えないライン、地図の上にもみ存在するラインである。このラインは、自由往来の「禁止」を意味する。一旦このラインを超えてしまえば、国境は意味を失い、存在しないに等しいものと化してしまう。地図上のあのラインを超えてしまえば、国境は消え、国籍は無効になるはずである。しかし国籍は、国境を越えると消えるのではなく、国境を越えた途端、初めて意味を持ち始めるのである。国境、国籍によって生み出されたのが「異邦人」である。あらゆる国境問題、民族問題はこの「異邦人」から始まるのである。そしてこの「異邦人」によって「国境」も「民族」も意味を失い、異なるものが異なるままで生きられる「異種混合的秩序」が形成されるのである。

ひとつの存在としてそこにあるもの、ひとつの生き物としてそこで暮らしているもの、彼らを見るとそこには「朝鮮族」も「朝鮮人」も存在しない。

中国朝鮮族は存在しない。しかし中国朝鮮族は、「中国朝鮮族は存在しない」という言葉の中に存在している。その言葉の中にのみ存在している。

金学鉄は中国朝鮮族の作家であると言われているが、彼の一生を、彼の「意味」を一言で簡単に決めつけることはできない。それは無謀に近い行為である。

金学鉄は 1916 年 10 月 30 日（彼のすべての年譜では、11 月 4 日になっている）、朝鮮の咸鏡南道元山で生まれた。2001 年 9 月 25 日、中国の延吉で、85 歳で亡くなった彼は、1985 年までは、北朝鮮の国籍を持っていた。そして彼はソウルで中学校を卒業している。抗日戦争中に、朝鮮義勇軍として中国で日本と戦った彼は、1941 年に日本軍の捕虜となり、長崎刑務所に 4 年間収監されていた。彼には、敵軍の捕虜としてではなく、「皇民」として、

「治安維持法違反」の罪が適用されたのである。

彼の一生は、朝鮮・韓国・日本・中国と深く関わっている。関わるだけではなく、彼はそれぞれの時代に、朝鮮と中国の国籍を持っていた。植民地時代は、「皇民」（日本人）としても認められていた。そして作家・金学鉄は、1945年のソウルで作家活動をスタートさせ、ピョンヤンでも作家活動を展開していた。従って彼を簡単に、中国朝鮮族の作家として決め付けるのは暴力である。

日本軍との戦闘で左足に銃弾を受け、長崎刑務所でその足を切断された金学鉄は、釈放されてソウルに戻った後、作家活動を始めた。

1945年12月に金学鉄はソウルで、短編小説「ムカデ」を『建設週報』に発表した。それを皮切りに、1年間で10篇の小説を発表した。朝鮮文学者同盟の機関紙『文学』の創刊号に『タバコスープ』、『新文学』に「亀裂」を、そして『ソウル文学』に「魚肝油精」などを発表したのである。

1946年に越北して、ピョンヤンで『労働新聞』記者、『民族軍隊』の主筆として勤めていたが、1950年に朝鮮戦争が始まると中国に渡り、北京の中央文学研究所で研究員として文学活動を続けた。1952年から延辺朝鮮族自治州に定着。1957年から反動分子とされ、24年間、中国共産党の政治的迫害を受けた。文化大革命の渦中、毛沢東の個人独裁を非難した政治小説、『20世紀の神話』の「筆禍事件」で10年間、獄中生活を強いられた。

1980年12月5日、再審により金学鉄には無罪判決が下された。所謂「平反（名誉回復）」である。「平反」された金学鉄は、24年間停止していた文学活動を再開するのである。

金学鉄の著書には、長編小説『海蘭江よ、語れ』、『20世紀の神話』、『激情時代』、短編小説集『無名小卒』、自叙伝『最後の分隊長』などがある。

朝鮮義勇軍、そして中国共産党の八路軍の戦士として日本軍と戦った経歴、ソウル、ピョンヤン、北京での作家活動など、華麗な経歴もあって彼は、中国朝鮮族の作家の中ではカリスマ的な存在となった。

彼が亡くなった翌年の2002年3月には、「金学鉄文学研究会」が延吉市（延辺朝鮮族自治州の首府）で成立された。個人の文学研究会が成立されたのは中国朝鮮族作家の中では初めてのことである。

20世紀90年代の半ば、長編小説『20世紀の神話』と『激情時代』、そして自叙伝『最後の分隊長』が韓国で出版され、韓国でも金学鉄研究が始まった。これが金学鉄文学の世界進出の始まりであった。日本では早稲田大学の太田益夫などの金学鉄研究者が出てきた。

金学鉄は、「亡命者」である。本人はそれを認めていないが、金学鉄は間違いなく「亡命者」である。亡命者は「逸脱者」であり、常に「周縁」に追い出されるものである。彼の作品もそうである。彼の作品も「亡命」している。中国で書かれた『20世紀の神話』は、中国で禁書となり、永久に出版禁止とされている。1996年12月、著者の金学鉄を離れ、『20世紀の神話』は自ら「亡命」して韓国で出版された。

しかし「亡命」は終わっていない。「亡命」は今も続いている。『20世紀の神話』は中国

で、そして金学鉄のすべての作品は北朝鮮で今現在も解禁されていない。

「亡命」は続いている。「亡命」は、「現在進行型」である。金学鉄の文学は、「亡命文学」ではなく、「亡命する文学」なのである。しかし、金学鉄は「国」に捕えられてはいない。金学鉄には「国境」が存在しない。金学鉄文学は、「中心」なき「周縁」で、「国境」なき「亡命」を始めているのである。

4. 二つの神話と「ゴミ文学」そして周縁文学の可能性

金学鉄の文学を「中国朝鮮族」という言葉から切り外すことは可能であろうか。しかしまずは、ひとつの質問。なぜ金学鉄の文学を「中国朝鮮族」から分離しなければならないのか。その理由は何処にあるのか。

「中国朝鮮族」という言葉の中には、人種と民族と国籍が潜んでいる。すでに、つねに亡命者の運命に負われている金学鉄には、人種も民族も国籍も存在しない（存在しないのに等しい）。彼はすでに朝鮮人であり、韓国人であり、中国人であり、日本人でもあった。従って、「中国朝鮮族」と「金学鉄」を並列させて固定した意味で使うことは不可能である。つまり、「中国朝鮮族の作家、金学鉄」という言葉は無効である。敢えてこの言葉を有効にさせるためには、「1985年以後の金学鉄は、中国朝鮮族の作家である」と変えなければならない。なぜならば、金学鉄は1985年に、国籍を朝鮮籍から中国籍へ変えたからである。金学鉄は、その時から「朝鮮族」となり、それ以前は朝鮮族ではなかったということである。

「朝鮮族」の代わりに使う言葉を考えてみると、それは、「周縁」という言葉である。「周縁」という言葉の中には、人種も民族も国籍も存在しない。しかし「朝鮮族」と「周縁」は対立しない。両者は矛盾しない。「朝鮮族」を「周縁」の意味で使う可能性はいくらでもある。もしそれが可能であるなら、「周縁」の意味で、金学鉄の文学を「朝鮮族」の文学であると言ってもいい。

「金学鉄」という名には二つの「神話」が申し掛かっている。「傑出した抗日闘士」と「偉大な作家」という「神話」である。

延辺大学の崔美玉の論文、「金学鉄散文研究」の冒頭には、次のような一節がある。

김학철은 과란만장의 인생려정을 걸어온 걸출한 투사이며 작가이다.

일제에 강점된 조선에서 나서자란 김학철은 망국노의 비분을 안고 민족해방투쟁에 투신했다. 그는 수많은 역경과 시련을 이겨내면서 단순한 반일테로분자, 민족주의자로부터 철저한 맑스주의자로 탈바꿈했고 해방후에는 <<좌>>경로선으로 말미암아 갖은 고초를 겪어야 했다. 광란의 세월, 한 작가에게 들쭉워진 터무니없는 모욕과 기시, 비인간적인 폭행 그리고 전사회적인 혼란과 무질서, 그 <<지옥>>같은 세상에서 작가 김학철은 얼마나 무서운 고통을 겪어야 했던가? 우리는 여기서 한 작가의 깊은 사색과 결단의 발자취 그가 창출한 산문작품을

통해 그 인간과 문학세계에 들어가보려고 한다.

金学鉄は、波乱万丈の人生旅程を歩んできた傑出した闘士であり、作家である。

日帝に強制的占領された朝鮮で生まれ育った金学鉄は、亡国の悲憤を抱いて民族解放闘争に身を投げた。彼は数多くの逆境と試練に勝ち抜きながら、単純な反日テロ分子、民族主義者から徹底したマルクス主義者へと変身し、解放後には、「左」傾路線によって様々な苦難に会わなければならなかった。狂乱の歲月、一人の作家に被せられたとんでもない侮辱や差別、非人間的な暴行、そして全社会的な混乱と無秩序、その「地獄」のような世の中で作家金学鉄は、どれ程恐ろしい苦痛を味わわなければならなかったのか。私たちはここで、一人の作家の深い思索と決断の足跡、彼が創り出した散文作品を通じて、その人間と文学世界に入ってみようと思う²。

延辺教育出版社の崔松月の「金学鉄の『激情時代』研究」は、次のように始まっている。

김학철은 민족의 해방위업을 위하여 영웅하게 싸운 항일투사이며 조선족이 낳은 저명한 작가이다. 파란만장한 인생행로를 경유한 김학철은 1945년 11월부터 2001년 9월까지 56년동안의 창작실천속에서 피눈물겨운 생활체험과 뛰어난 지성 및 남다른 예술감각으로 우리 민족의 투쟁과 삶의 현장에 조명을 준 훌륭한 작품들을 내놓았는바 중국조선족당대문학의 발전에 크나큰 기여를 하였으며 중국조선족당대문단의 거두로 자리매김하였다.

金学鉄は、民族解放という偉業のため英雄的に戦った抗日闘士であり、朝鮮族が産んだ著名な作家である。波瀾万丈の人生行路を経由した金学鉄は、1945年11月から2001年9月まで、56年間の創作実践の中で、血と涙の生活体験と優れた知性及び格別な芸術感覚で、我が民族の闘争と人生の現場に照明を与えてくれる立派な作品を生み出し、中国朝鮮族の当代文学の発展に大きく寄与し、中国朝鮮族の当代文壇の巨頭として位置づけられた³。

復旦大学の姜英の論文、「金学鉄小説の言語技巧研究—長編小説『激情時代』を中心に」の冒頭は次のように始まっている。

김학철은 중국조선족의 걸출한 항일전사이며 조선족문단의 로신이다. 그는 파란만장한 일생을 통해 수많은 역경을 이겨냈고 소설, 잡문, 회상기 등 수많은 작품을 창작함으로써 귀중한 문학유산을 남겨놓았다.

金学鉄は、中国朝鮮族の傑出した抗日戦士であり、朝鮮族文壇の魯迅である。彼は波瀾万丈の一生を通じて、数多くの逆境を勝ち抜き、小説、雑文、回想記など数多くの作品を創作することによ

² 『金学鉄文学研究 3-金学鉄論・若い世代の視角』延辺人民出版社（2006）52頁。

³ 同書、214頁。

って貴重な文学遺産をのこしてくれた⁴。

『金学鉄文学研究』には、金学鉄を追慕して作家、評論家、研究者たちが書いた文章が収録されている。著者の名前と内容は紹介しないが、そのタイトルだけを見ても、金学鉄の存在の重みを感じ取ることができる。そのタイトルを並べてみよう。

「意志の化身—金学鉄翁 (의지의 화신-김학철옹)」

「我が民族文壇 の大物 (우리 민족문단의 거물)」

「我が民族の魂—金学鉄先生を懐かしむ (우리 민족의 혼-김학철선생을 그리며)」

「我が文壇の巨匠—金学鉄先生 (우리 문단의 어른-김학철선생)」

「巨人の臨終(거인의 립종모습)」

「現代史の証言 (현대사의 증언)」

「永遠の金学鉄(영원한 김학철)」

「我が文壇の山脈(우리 문학의 산맥)」

以上から分かるように、金学鉄は、抗日闘士、著名な作家として公認されている。ここからは、「抗日闘士、著名な作家」となった金学鉄の人生経路、彼が自ら選び、自ら歩んできたその行路を辿ってみることにする。

金学鉄が祖国を離れ、中国へ向かったのは、「亡国の悲憤を抱いて民族解放闘争に身を投げる」ため、「民族の解放偉業」のためだといわれているが、実はそれだけではない。

金学鉄は、中学校を卒業した後、日本へ渡航しようとしていた。彼は中国行を望んではいなかった。彼は、その理由について何も言っていないが、多分「留学」のためであっただろう。

中学を出て、はじめは日本に行こうと思った。ところが日本に行くにあたって、渡航証が出ない。お前はだめだと言うんですね。光州学生事件の時の記録が書類に残っていて、渡航証が出せないという。ただ、尻馬に乗って騒いだけなのにね。でもそのころの朝鮮はここと違って言論の自由がありましたな。写真入りで黄埔軍官学校で学生を応募していると雑誌に出てました。それに応じようと思った。そこで中学をでて元山にいったん帰った。母に用をたのまれた際、その金を盗んでソウルに逃げた。一人息子だから相談したって許してくれるはずがないんで家出したんです。ソウル駅の二等待合室で母に手紙を書いた。母さんさようなら。この手紙を受け取るころ、私は中国に行ってるでしょうと書いた⁵。

⁴ 『金学鉄文学研究 3-金学鉄論・若い世代の視角』 延辺人民出版社 (2006) 528 頁。

⁵ 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』 緑蔭書房 (2003) 350 頁。

もし金学鉄に渡航証が出されたらどうなっただろうか。彼は日本に行き、そこで大学に通い、「親日派」になったかも知れない（勿論、ありえないことだが）。もしそこで作家になったら、金史良と似たような人生の道を歩んだかも知れない。日本にいる金学鉄には、『激情時代』や『20世紀の神話』とは異なる物語が始まったに違いない。同じ金学鉄であっても、日本に行った金学鉄には、『激情時代』や『20世紀の神話』が書けないはずである。

金学鉄には中学時代に、日本の警察に泥棒扱いされたことがある。日本人が経営する有名な日韓書房で島崎 藤村の『破戒』を買い、家に帰る途中、黄金町で「おいー」と警察に呼び止められた。そして有無を言わず、泥棒扱いされた。

彼は屈辱を感じた。憤慨した。ただ朝鮮人であるということで泥棒扱いをされるとは。その日の午後は、寛勳洞付近の古本屋ですっと本を読んだ。そこで李相和（리상화）という詩人の詩に初めて出会った。

今は他人の地

奪われた野にも春はくるのか

この叫び声に血が沸き上がった。亡国の民、奪われた地で生きるのが恨めしかった。この小さなことが彼の人生行路を根本的に変える転換点となった。

金学鉄の華麗な経歴をみると何か雄大な抱負を背負って革命家になったような気がするが、実はそうでもなかった。彼の人生を変えるきっかけになったのは、「おいー」という呼びかけのようなものであった。この「おいー」という呼びかけがなかったら、彼は泥棒扱いをされなかったかも知れない。そして李相和の詩に出会うのもずっと後のことになったかもしれないし、その詩に出合ったとしてもそれほど興奮し、それほど血が沸き上がらなかったかも知れない。いわゆる大事件も実は、このような些細なことから起きるのである。12歳の時に、日本の女の子に振られたことや日本の警察に泥棒扱いされたことなどが民族的劣等感を目覚めさせ、それが重なって或る種の民族的感情、反日的な感情に変わって行ったのかもしれない。

その時の朝鮮には、また言論の自由があったらしく、黄埔軍官学校で朝鮮人学生を応募しているとの広告が、写真入りで雑誌に出ていた。それに応じようと思って中国へ行ったら、金学鉄は言っている。

金学鉄が中国へ行って、革命家になり、抗日闘士になったのは、「亡国の悲憤を抱いて民族解放闘争に身を投げる」ため、「民族の解放偉業」のためではなかった。いや、それもあられるかもしれないが、直接の原因になったのは、「おいー」というひとつの呼びかけと、雑誌に載った一枚の学生募集の広告であった。

これが「革命家・抗日闘士」金学鉄の真相である。勿論、彼が「革命家・抗日闘士」ではないと主張するつもりはない。金学鉄は、本当に偉かったし、尊敬すべき人である。問

題は、「革命家・抗日闘士」のイメージだけを拡大し、「神話化」することである。

金学鉄は、幼い頃から文学が好きであった。

小学校時代、勉強しないで文学書ばかり読んでいた。赤穂浪士、桜田門外の変、白虎隊の話に血を沸かした。朝鮮のものは貧弱でほとんど読まなかった。読んだのは、まず西条八十、次は雨情、北原白秋、この3人には大きな影響を受けた。それから少したって土井晩翠、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、田山花袋、徳富蘆花、二葉亭四迷、何でも読みました。赤本というのがあって、忍者物とかも読んだ⁶。

金学鉄は、小学校時代から読書が好きであった。彼は小学校時代に、すでに西条八十、雨情、北原白秋、土井晩翠、芥川龍之介、久米正雄、菊池寛、田山花袋、徳富蘆花、二葉亭四迷を読んでいた。中学校時代、ソウルの寛勳洞でもよく読書したといわれている。

金学鉄が初めて文学作品を書いたのは、1934年中学校を卒業した直後であった。小説を書いて文芸誌『朝鮮文壇』に投稿するが、失敗する。その後、彼は二度と小説を書くまいと決意する。

문학지 <<조선문학>>이 복간됐을 때 나는 볼런티어로 뛰어들어 심부름군이 됐다. 심부름을 다니면서도 은근히 판마음이 있어서 제 주제도 돌보잖고 명색소설 한편을 써다가 편집부에 디밀었더니 편집장 리학인이 읽어보고 <<이봐 총각, 이두 만나서 빼다귀추렴부터 하겠나? >> 하는 바람에 나는 도리어 웃음이 나왔다. 등뒤에서 몰래 어른의 흉내를 내다가 들킨 아이모양 쑥스러웠다.

文学誌『朝鮮文学』が復刊された時、私はボランティアでお手伝いをした。お手伝いをしながらも、ひそかに望むものがあって、身の程知らず、いわゆる小説を書いて編集部を持っていくと、編集長の李学仁が読んで、「おい、歯もないのに骨から舐めるつもりか」と言うので、私はあべこべに笑ってしまった。後ろでこっそりと大人の真似をし、それがばれた子供みたいに恥ずかしかった⁷。

これは少年期の金学鉄が、作家になる夢を抱いていたことの証拠である。しかしその夢は、編集長の一言で破壊されたのである。彼は、二度と小説を書くまいと決心した。

中国で朝鮮義勇軍は主に宣伝工作をしていたので、金学鉄はそこで歌詞や演劇の脚本などを書いてきた。しかし彼が本格的に作家活動に専念しようとしたのは、長崎刑務所においてであった。長崎刑務所で片足を切断された後のことであった。

⁶ 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』緑蔭書房（2003）347頁。

⁷ 『金学鉄文集 4-私の道』延辺人民出版社（1999）2頁。

나는 혁명군인으로서의 출로가 아주 막혀버린 고비에서 문학의 길로 전환할 결심을 내렸다. 하루강아지 범 무서운줄 모르는 격이다.

私は革命軍人としての出世が絶対にないと諦めた時、文学の道へ転換しようと決心した。生まれただけの子犬が虎の恐ろしさを知らないように⁸。

長崎刑務所で片足を切断された金学鉄は、それからの人生のために、悩んでいたに違いない。足のない自分には、作家になることしかないと思っていたかも知れない。

1945年10月、長崎刑務所から釈放されソウルに戻った金学鉄は、すぐに文学活動を開始するのである。

日本で解放を向かえて長崎からソウルに帰って、そこに1年間いたんですよ、私ね、ソウルにいたころ大学病院の小児科に入院したんですよ。なぜかと言うと、その小児科の科長が、南労働党の党员なんですよ。李炳南^{イ・ビョンナム} (1914～?)、彼は後に北に行って保健大臣になったんだ。その人がいた関係で小児科に入院したわけです。北にいた妹を呼んで2人で入院したんですよ。そこで小説を書いたんだ。そこが私の本拠になったわけです。多くの人とその小児科を訪ねてきた。たくさんの人にそこであったんだ⁹。

大学病院小児科で小説を書き始め、短編小説「ムカデ」を『建設週報』(1945年12月)に発表する。それを皮切りに、1年間で10篇の小説を発表した。朝鮮文学者同盟の機関誌『文学』の創刊号に「タバコスープ」、『新文学』に「亀裂」を、そして『ソウル文学』に「魚肝油精」などを発表した。

私が当時書いたのは、大部分朝鮮義勇軍を扱った「タバコスープ」みたいなもので10編ほど書いた。10編みな発表したんですよ。いろいろな雑誌にね¹⁰。

金学鉄は小説を通して文壇の多くの先輩たちと親交を結ぶことになった。李泰俊(리태준)、金南天(김남천)、安懷南(안회남)、韓暁(한효) 朴啓周(박계주)、尹世重(윤세중)、玄徳(현덕)、李根榮(리근영)、宋影(송영)、李源朝(리원조)、そして林和(림화)の夫人・池河蓮(지하련)など。

その時、私と会った人はほとんど粛清された。李泰俊、李源朝(1904～55 文学評論家。解放直後、38度線を越えて北に入って労働党中央委員会宣伝・扇動部副部長をしていたがアメリカのス

⁸ 『金学鉄文集 4-私の道』延辺人民出版社(1999) 4頁。

⁹ 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』緑蔭書房(2003) 381頁。

¹⁰ 同書、381頁。

パイとして処断された)、金南天(1911~55? 小説家。文学評論家。朝鮮プロレタリア芸術同盟に加担。解放後、越北するも失脚)、韓暁(1912~? 文学評論家。朝鮮プロレタリア芸術同盟中央委員。解放後、越北するも失脚)、安懷南(1910~? 小説家。解放直後、越北)ら、皆そう。彼らとスキヤキをつつきながら雑誌社主宰の座談会をやったこともある。コーヒー店で会をやったこともある。林和夫人、池河蓮と知り合ったのもその会で¹¹。

小説家、李無影(리무영、1908~60。小説家。解放後は韓国で自由文学家协会副会長)が主宰する雑誌『新世代』に「亀裂」を発表した際、李無影が金東里(김동리、1913~95。小説家。左翼文学に反対し、民族主義的純粋文学の立場に立つ)に頼んで序文を書かせた。これに対して、直ちに左翼から抗議があった。金東里のような反動作家になぜ序文を書かせたのかと。勿論、金学鉄本人は序文のことなど何も知らなかった。

社会主義陣営と自由主義陣営が左右に分離しているソウルで、金学鉄は左翼作家として文学活動を開始したのである。ソウルでの華やかな活動は、彼の身分を暴露させた。米軍政による左翼弾圧が始まると、金学鉄は北に避難しなければならなかった。

1946年に越北した金学鉄は、ピョンヤンで『労働新聞』の記者、『民族軍隊』の主筆を務めた。1950年に朝鮮戦争が始まると中国に渡り、北京の中央文学研究所で研究員として文学活動を続けた。1952年から延辺朝鮮族自治州に定着。1957年から反動分子とされ、24年間、中国共産党の政治的迫害を受けた。文化大革命の渦中、毛沢東の個人独裁を非難した政治小説、『20世紀の神話』の「筆禍事件」で10年間、獄中生活を強いられた。

1980年12月5日、再審により金学鉄には無罪判決が下された。所謂「平反(名誉回復)」であった。「平反」された金学鉄は、24年間停止していた文学活動を再開した。

金学鉄の著書には、長編小説『海蘭江よ、語れ』、『20世紀の神話』、『激情時代』、短編小説集『無名小卒』、自叙伝『最後の分隊長』などがある。

金学鉄は、「朝鮮族が産んだ著名な作家」であり、「朝鮮族文壇の魯迅」であり、「傑出した闘士であり、作家である」といわれているが、彼自身は自分の文学に満足していなかった。彼は50年代の自分の文学を「ゴミ文学」と言っていた。

연구원으로 있는 동안 나는 중편소설「범람」과 단편소설「군공메달」을 인민문학출판사에서 냈는데(물론 정령 풍설봉 두 분의 덕분으로) 당시는 머리가 뜨거워서(어떡하다 발행부수가 10 만을 돌파하는 바람에) 제법 괜찮다고 ‘내가 일류반 작가쯤은 된 게 아닌가’ 라는 생각을 했었으나 나중에 머리가 식은 뒤 다시 생각해보니 그것은 순 교조주의자의 잡꼬대, 낮 뜨거울 정도의 쓰레기 문학이었다.

研究員をしている間、私は中篇小説『氾濫』と短編小説『軍功メダル』を人民文学出版社で出したが(もちろん丁玲、馮雪峰お二人のおかげで)、当時は頭が熱くなって(如何してか発行部数が10

¹¹ 同書、381-P382頁。

万を突破したので)、結構良いものだと、「私は一流半の作家ぐらいはなったのではないか」と思い込んだが、のちほど静かに考え直してみると、それは単なる教条主義者の寝言、顔が赤くなるほどのゴミ文学であった¹²。

『20世紀の神話』について金学鉄は、小説なのカルポルタージュなのか、それとも唯の資料集なのか、まったく識別がつかないと言い、芸術性や文学作品的価値が水準以下であると言った。そして政治小説『20世紀の神話』の政治的未熟性について、次の6つの点を挙げている。

첫째, <<반우파투쟁>>을 99 프로 잘못된 정치운동이라고 소설에서는 단언을 했는데, 실은 99 프로가 아닌 99.999 프로였다는것.

둘째, 20 세기에, 그러니까 본세기에, 능히 사회주의사회를 이룩할수 있으리라고 굳게 믿어 의심을 하지 않은것.

셋째, (20 세기의) 사회주의제도를 <<인민대중이 정권을 잡고있으며 생산수단에 대한 사회적소유에 기초해 인민들의 복리를 계통적으로 증진시킬 목적밑에 높은 과학기술적도대우에서 생산을 끊임없이 개혁적으로 발전시키며 온갖 착취와 압박을 영원히 없애고 각자는 능력에 따라 일하며 각자에게는 로동의 질과 량에 따라 분배를 하는 가장 선진적인 사회제도>>라고 하옵신 설교를 곧이곧대로 믿은 것.

넷째, 1 인독재만 척결을 하면 프로레타리아독재로 능히 사회주의지상락원을 이룩할수 있으리라고 확신을 한것.

다섯째, 농업의 합작화(협동화)와 집단화만이 농민들에게 행복을 가져온다고 철석같이 믿은것.

여섯째, 이미 청산이 된지도 오랜(이미 타도가 된지도 오랜) 지주나 부농들을, 그 자손들 암질러 사회주의의 적으로 간주하고 증오를 한것.

일언이폐지하고 미숙하기가 짝이 없고 또 유치하기가 짝이 없다.

①、「反右派鬭争」을 99 퍼센트誤った政治運動だと小説では断言したが、実は、99 퍼센트でなく、99.999 퍼센트だったということ。

②、20 世紀、だから本世紀には、社会主義社会を完全に実現できるだろうと堅く信じて疑いもしなかったこと。

③、(20 世紀の)社会主義制度を、「人民大衆が政權を握り、生産手段の社会的所有に基づき、人民の福利を系統的に増進させるため、高い科学技術の下で、生産を絶えず改革的に發展させ、あらゆる搾取や圧迫を永遠になくし、各自は能力により仕事をし、各自には労働の質と量により分配がなされる最も先進的な社会制度」だという説教を、ありのままに信じたこと。

④、一人の人物による独裁だけを清算すれば、プロレタリア独裁の下でも、十分に社会主義地上

¹² 金虎雄・金海洋『金学鉄評伝』実践文学社(2007) 244-245頁。

樂園を実現できると確信したこと。

⑤、農業の合作化(協同化)と集団化だけが、農民に幸福を与えてくれると固く信じたこと。

⑥、すでに清算されて長い時間が経った(すでに打倒されて長い時間が経った)地主や富農を、その子孫までも含めて、社会主義の敵とみなし、憎んだこと。

一言で言うと、未熟極まりない、幼稚極まりないことだ¹³。

金学鉄にもう一度『20世紀の神話』を書かせたら、絶対にあのようには書かないと言った。そして『20世紀の神話』を書いた当時、自分はまだ思想意識領域の「神話時代」に生きていたと言っていた。

金学鉄は確かに、傑出した闘士であり、著名な作家であった。しかし彼は「神話時代」を生き抜いた作家であった。彼は自分が一生をかけて信仰してきた共産主義が、「嘘」であり、創り出された「神話」であることを知らなかった。

ここで金学鉄は自分の文学の、芸術性、文学性、政治性の未熟さを語っている。しかし「周縁作家」としての金学鉄、彼が携わっている「周縁文学」の価値は、その芸術性、文学性、政治性にあるのではない。「周縁文学」の価値は、金学鉄が批判しているその「未熟さ」にあるのだ。

金学鉄が作家として成功したのは、彼の文学の芸術性、文学性、政治性によるものではない。そうではなくて、金学鉄文学の可能性は、文学と非文学、歴史と非歴史の間の曖昧さから生まれるのである。

「私がソウルにいた当時、周りの人たちは、日本軍と敵対して戦ったことはほとんどないんです。学徒兵として、日本軍側について戦争した人はいるけど、日本軍の反対側にたつて日本軍に刃向かって戦争した経験はないんだ。だから私は人気があったんですよ。こういう人もいたんだなあ。それに一本足だからもっと目につくんだ。それで多くの人に出会った」¹⁴。

「周縁作家」金学鉄の可能性は、「こういう人もいたんだなあ」という言葉の中に、「一本足」のみずぼらしさの中にあるのだ。

参考文献

金学鉄『20世紀の神話』韓国創作と批評社(1996.12)

『金学鉄文学研究 1-朝鮮義勇軍最後の分隊長・金学鉄』延辺人民出版社(2002.09)

『金学鉄文学研究 2-朝鮮義勇軍最後の分隊長・金学鉄 2』延辺人民出版社(2005.05)

『金学鉄文学研究 3-金学鉄論・若い世代の視角』延辺人民出版社(2006.10)

¹³ 『金学鉄文集 5-天国と地獄の間』延辺人民出版社(2002) 179頁。

¹⁴ 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』緑蔭書房(2003) 381頁。

- 『金学鉄文学研究 4-朝鮮義勇軍最後の分隊長・金学鉄 4』 延辺人民出版社（2007. 10）
- 任範松、権鉄編『朝鮮族文学研究』 黒龍江朝鮮民族出版社（1989）
- 趙成一、権鉄編『中国朝鮮族文学史』 延辺人民出版社（1990）
- 延辺文学芸術研究所編『金学鉄論』 黒龍江朝鮮民族出版社（1990）
- 呉相順『中国朝鮮族小説史』 遼寧民族出版社（2000）
- 大村益夫『中国朝鮮族文学の歴史と展開』 緑蔭書房（2003）
- 全盛鎬、林淵、尹允鎮、趙一男編『中国朝鮮族文学批評史』 民族出版社（2007）
- 金虎雄・金海洋『金学鉄評伝』 実践文学社（2007）
- ロラン・バルト著作集 3『現代社会の神話』 みすず書房、下澤和義訳（2005）
- ロラン・バルト著作集 5『批評をめぐる試み』 みすず書房、吉村和明訳（2005）
- ロラン・バルト著作集 6『テキスト理論の愉しみ』 みすず書房、野村正人訳（2006）
- ロラン・バルト『テキストの快樂』 みすず書房、沢崎浩平訳（1988）
- ロラン・バルト『エクリチュールの零度』 ちくま学芸文庫、森本和夫、林好雄訳（2005）
- 土田知則（ほか）『現代文学理論—テキスト・読み・世界』 新曜社（2002）